

# 八木山動物公園の魅力度アップを目指した地域住民ボランティア「楽芸員ダッチャ」の育成

著者	佐藤 飛鳥, 両角 清隆
雑誌名	EOS
巻	24
号	1
ページ	25-35
発行年	2012-02-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1241/00000118/">http://id.nii.ac.jp/1241/00000118/</a>



〔研究論文〕

## 八木山動物公園の魅力度アップを目指した 地域住民ボランティア「楽芸員ダッチャ」の育成

佐藤 飛鳥<sup>1)</sup>・両角 清隆<sup>2)</sup>

(2011年9月30日受理)

### Developing Local Residents as Volunteer Guides for Enhance the Attractiveness of Yagiyama Zoo

Asuka SATO<sup>1)</sup>, Kiyotaka MOROZUMI<sup>2)</sup>

#### Abstract

This study aims enhance to the attractiveness of Yagiyama Zoo, and developed the volunteer from local residents "Gaku-gei-in Datca (\*)" who study the episodes of Animals for they will be guide for the zoo will be loved by local residents. This year had set the goal to establish a way of learning about animals and zoo episodes. Our project team held four workshops (including speaking course) for verify whether the training methods is feasible approach and the workshops are enough, and we concluded the methodology is workable.

(\*) We named it from the sound, and it means "fun zoo guide" in dialect here in Sendai, Japan. The sound is equal to "gaku-gei-in" that means curator in Japanese.

#### 1. 概要

本研究では、八木山動物公園の魅力度をアップし、地域住民から愛される動物公園になるためにはどのような方策が考えられるかを検討したことが出発点となった。この共同研究の特徴は、地域関係者との共同研究であるだけでなく、ライフデザイン学部の3学科の専門分野の知見を議論により共有し、分業・協力体制を築いたことにあり、学部内での初の取り組みである点にある。学内でもこれまでの研究の枠組みを超えたチーム制の研究活動が標榜されつつある中、先進的な取り組みといえる。地域住民から案内ボランティアを募ってコース紹介と動物に関するエピソードを学習してもらい「楽芸員ダッチャ」を養成し、地域活性化を図ることを本プロジェクトの最終目的とするが、この一連の流れのうち、今年度は動物公園や動物に関するエピソードの学習方法を確立することを目標と定めた。そこで、楽芸員ダッチャ認定までの学習会実施回数4回（話し方講座含む）での養成方法が可能かどうかを実践検証した。本論文ではその内容を報告する。

---

1) 経営コミュニケーション学科 講師 Lecturer of Department of Management and Communication

2) クリエイティブデザイン学科 教授 Professor of Department of Creative Design

## 2. 本研究の目的

大学を取り巻く地域の状況が刻々と変化している。仙台市地下鉄東西線「動物公園駅」(仮称)工事が着々と進む中、これに合わせた都市計画(仙台市主導)が進行している一方で、地域住民を主体とする「八木山地区まちづくり研究会」では、駅前周辺地域の都市計画(主なものとして①商業・生活サービス施設等の立地誘導, ②駅の利便性・豊かな自然環境を活かした駅前居住の推進, ③八木山動物公園の再整備の推進, ④動物公園と八木山ベニールランドとの連携強化による地域の魅力向上, ⑤駅への移動経路と周辺整備など)を検討してきた。本研究は、これらの取り組みの中でも特に③に注目し、地域に根ざした大学として、我々がこの2つをうまくつなぐ役割を担えないかと考えた。そこで、地域住民が「楽芸員」(がくげいいん)となって八木山動物公園の動物たちの紹介を行うことで動物とふれあったり、身近に感じてもらう接点を提供することで、まず最初に地域住民と動物公園の協同体制を築き、動物の声を来園者に届けることのできる動物園として魅力を高めていくことで、地域とともに発展する動物公園づくりに寄与することを目的とした。

## 3. プロジェクト内容

### (1) プロジェクト構想と研究の意義

本共同研究は、平成21年度9月に東北工業大学沢田学長と八木山動物公園遠藤園長との間で合意され発足した、「八木山動物公園を魅力度No.1にするプロジェクト」を前身とするものである。平成22年度も本学からは沢田学長が出席し、「仙台市八木山動物公園、八木山ベニールランド、東北工業大学、八木山市民センターの八木山地区への地域貢献に関する覚書」を交わし、八木山地区の活性化に向けて関係する4つの主体の間で協力体制が確認された(平成22年6月29日)。これを受け、ライフデザイン学部3学部のコラボレーションにより、地域密着型の研究をしたいと立ち上げた研究グループである。そのプロジェクトメンバーは以下のとおり(いずれも敬称略)である。

#### 学内共同研究者

菊地良覺, 志田正男(安全安心生活デザイン学科), 篠原良太, 梨原宏, 堀江政広,  
両角清隆(クリエイティブデザイン学科), 佐藤飛鳥(経営コミュニケーション学科),  
諏訪悠紀(大学院工学研究科デザイン工学専攻)

#### 学外参加者

仙台市建設局八木山動物公園 遠藤源一郎(園長) 大内利勝(副園長, ~2011年4月末日) 阿部正浩(施設係長) 藤原繁実(副園長, 2011年5月1日~) 小野寺順也(飼育展示係長, 2011年5月1日~)

#### 八木山連合町内会

齊藤満男(会長) 玉田彰(副会長)

#### 楽芸員ダッチャ候補者

佐々木勁, 佐々木慶雄, 庄司幸正

八木山動物公園にたいする、東北工業大学、とりわけライフデザイン学部の役割は以下の通りである。クリエイティブデザイン学科がユニバーサルデザイン、ユーザーインターフェイス、情報共有・地域コミュニティの支援を担当し、安全安心生活デザイン学科が地域のデザイン、施設の結節を担当し、経営コミュニケーション学科が地域のマーケティング、動物公園の入場者増の方策を担当することにより、『ライフデザイン学部』の力を結集する共同研究が開始されたのである。

本プロジェクト前身の取り組みでは、2つの大きな目標があり、第1部として「現動物公園の園内物的環境の点検と改善計画案の作成」、第2部として「動物と話ができる動物公園にするための研究」を掲げてきた。これをふまえ、本学参加者間で、平成21年度から動物園視察（現状調査、イベント参加）を含め、1月に1回ペースで計8回の議論を重ねてきた。まず、現状調査から園内の通路の起伏（坂道）問題や、案内表示・ロゴなどのビジュアル・アイデンティティ、動物展示方法やイベントの周知方法などの問題点が浮かび上がった。これらを元に、特に本学が費用面でも計画面でも主体的に推進できることはなにかを考え、今年度は第2部について取り組みを行うことを決めた。

そして、平成22年度に東北工業大学新技術創造研究センターが主催する地域共同研究プロジェクト応募に向けた取り組みが動物公園との本格的連携のスタートとなった。全8回の現地調査+研究会をベースに各自の専門領域から動物公園に対して提案したいことという形で動物公園の魅力度アップ・活性化のための方策を提示し、プロジェクトチームとして取り組むテーマの絞り込みを行った(表1, 表2: 取り組むテーマ候補の関係図, マトリックス表)。これを元に、2010年6月16日に八木山動物公園関係者及び八木山連合町内会関係者(上記学外参加者5名)に対しプレゼンテーションを行い、本共同研究の趣旨理解および協力体制について確認を行った(第9回研究会)。

表1：取り組むテーマ候補の関係図



表2：取り組むテーマ候補のマトリックス表

	A.環境		B.動物		C.住民参加		D.情報		E.公園を楽しむ手段	
	項目	費用	項目	費用	項目	費用	項目	費用	項目	費用
a.環境	施設(遊具)の活用からた遊具設置をつくる	***								
	バリアフリー施設のデザイン(エスカレーター、敷き板など)	***								
	植物に動物の姿、その動物の動物像	***								
	樹木(樹皮)をつぶして動物像(アリスのデザイン)	***								
	動物像を植える方法	***								
	バリアフリー施設のデザイン(遊具を植える、動物の姿を植える)	***								
	遊具、動物の姿(バリアフリー施設)	***								
b.動物	動物像の設置(デザイン)をつくる、デザイン、動物像、動物像、イタリシ...	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
c.住民参加	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
d.情報	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
e.公園を楽しむ手段	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								
	動物の姿(バリアフリー施設)	***								

\*費用の読みかた  
20万円以上...\*\*\*、10-20万円...\*\*、10万円以下...\*、不明(具体案による)...無記入

共同研究参加団体の代表者の承諾書は八木山動物公園園長、八木山連合町内会長・副会長の2名からいただいた。八木山動物公園内で本取組について検討いただき、「(園長の)上司と相談した結果、大学や地域の人々と共同研究をすることは大切なことなので、是非一緒にやりたい。」とのお言葉を頂き、準備は万端となった。その後の展開として、八木山連合町内会長・副会長の声掛けにより八木山連合町内会員が楽芸員ダッチャ候補者として学習会に参加していただけることとなった。この案内方法・募集方法、あるいは人選方法については後に検討課題ともなるが、初年度の「楽芸員ダッチャ育成方法の検討と試行」にあたっては、結果的に社交的で協力的な方々を紹介いただけたという点からプロジェクトにとっては最善と言いうる方法であった。

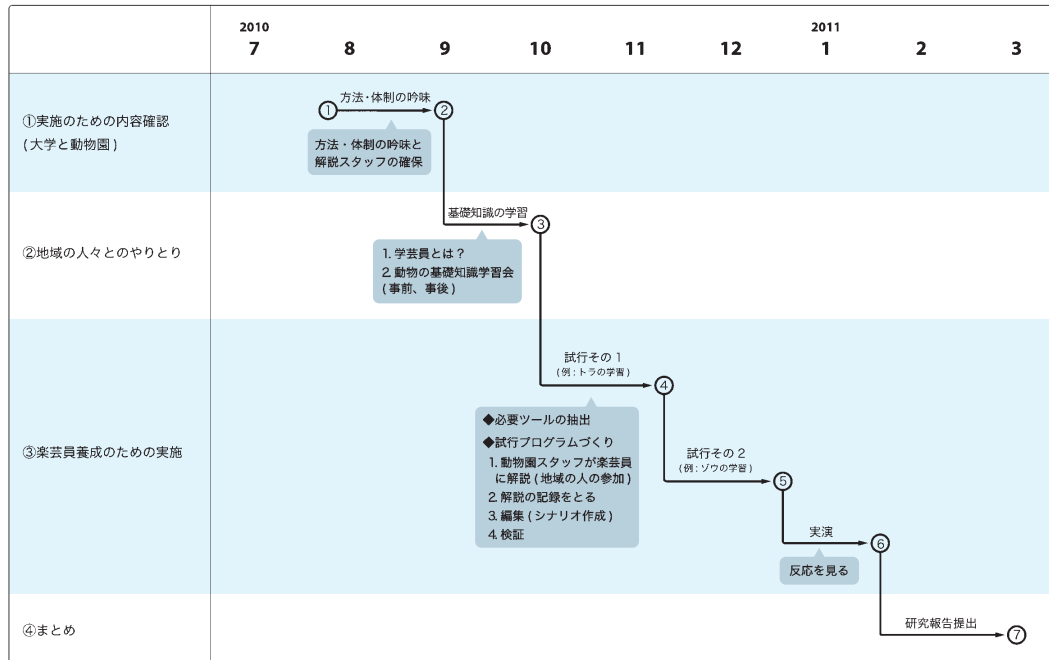
こうして2010年度のプロジェクでは楽芸員ダッチャの育成に際して、学習会を2回、実演を1回というスケジュールでプログラムを組み、その都度検討を加えながら試行を開始した(表3:2010年度計画表)。



表3：2010年度計画表

八木山動物公園共同研究プロジェクト  
2010年度年間計画表 ver.2

作成日：2010.07.27, 更新日：2010.08.25 作成者：諏訪悠紀



## (2) 楽芸員（がくげいいん）とは

楽芸員（がくげいいん）とは博物館などで来場者にガイドを施す「学芸員」をもじった造語である。本プロジェクトの最終目標として、動物1体1体のストーリーを知り尽くした動物ガイドを育成するとともに、その習得知識量に応じてランク付けをしてモチベーションアップを図りたいと考えた。そこで地域町内から園内ボランティアを募り、ボランティアの参加モチベーションを上げるためにも、親しみやすさを高めるためにも「楽芸員ダッチャ」と名付けることとした。そして楽芸員らが着用する専用スタッフジャンパーを作成することにより、来園者にもガイドボランティアの存在をアピールした。なお、スタッフジャンパー用のロゴ作成においても本共同研究チームがリーダーシップを取った。これを今後のビジュアル・アイデンティティのベースとして活用していく。

楽芸員の主な活動として、飼育責任者から動物の細かな情報を教わりながら知識を深めてもらう。

## (3) マーケティング的観点からみた楽芸員

こうした最終目標を設定するまでの経緯として、本学参加者間で平成21年度から動物公園視察（現状調査、イベント参加）を含め、1月に1回ペースで計8回の議論を重ねてきた。八木山動物公園現地調査より、主に①園内の通路の起伏（坂道）問題②案内表示・ロゴなどのビジュアル・アイデンティティの問題、③動物展示方法やイベントの周知方法などの問題が指摘された。これらを元に、特に本学が費用面でも計画面でも主体的に推進できることはなにかを考え、今年度の取り組みを決めた。

楽芸員ダッチャには、例えば「ゾウ」という生物についての情報だけでなく、ゾウの名

前、性格、癖、動物園での出来事、ストーリー、健康状態など、動物1体1体に深く関わり、個体差を含んだものにする。こうすることによって、ボランティアには動物に対する愛着が生まれ、来園者にガイドする際にもほかの動物園では聞けない情報を提供できる。これが八木山動物公園の USP (Unique Selling Proposition) となり、魅力の1つとなることを期待している。さらに、楽芸員専用スタッフジャンパーを作成し、来演者にもガイドボランティアの存在をアピールする。本人にとっての生涯学習の機会として、また来園者にとっても個体情報や動物の癖、ストーリーを知ることによって動物にたいする愛着がわき、リピート来園につながると考えている。

#### (4) コミュニティーの核としての Web サイトの作成

楽芸員が活動していても、その活動が広まるのには工夫が必要である。動物公園および地域の活性化の手段として、楽芸員による情報発信および情報共有を考えている。具体的には、動物の情報や動物公園の活動を、楽芸員や楽芸員サポーターが紹介する Web サイトである。

当初、八木山動物公園の公式 Web サイト「仙台市 八木山動物公園」(仙台市のホームページの一部)の改定による情報提供を考えていた。しかし、公共の Web サイトの変更等は容易ではないことが分かり、動物公園側との協議の結果、『八木山動物公園ウェブサポーター』制度(注1)を利用して、『楽芸員ダッチャ』による応援サイトを構築しその Web サイトを公式 Web サイトへリンクすることとした。この応援 Web サイトを『八木山動物公園ボランティアガイド“楽芸員ダッチャ”の広場(仮)』とした。

本サイトの特徴は以下の通りである。

- 1) 現在高齢の方が中心の楽芸員でも、情報の掲載が容易で情報発信を継続的にできる  
情報掲載・情報編集が容易であることを目指す。
- 2) 動物に興味がある人々にとって魅力的な、動物の動画や静止画を扱えること。
- 3) 楽芸員の活動を伝えやすいコンテンツを用意する(例、楽芸員日誌等)。

本サイトはクリエイティブデザイン学科の学生により制作されており、実社会の活動と繋がった学びの場となっている。また東北工業大学学生が楽芸員サポーターとして、楽芸員の活動の記録や Web サイトの運営面で協力している。

### 4. 活動経過

#### (1) 活動の歩み

先述の通り、平成22年度の活動は、コミュニティ形成と地域活性化のために「楽芸員ダッチャ」の育成方法が実行可能かどうかを検討するための試行年度とした。今年度は対象地域を八木山町内会、対象者を町内会に属する3名の高齢者)にたいし、ガイドボランティアとして「楽芸員ダッチャ」になっていただくべく、動物公園と動物に関する勉強会、話し方講座を数回にわたり開催した(詳細は表4)。

表4：第1期“楽芸員”養成課程

内 容	日 時	場 所
『楽芸員』住民向け説明会（候補3名参加）	平成22年11月24日 10：00～11：15	東北工大八木山キャンパス
第1回研修会－動物公園の概要の説明	平成22年12月8日 10：00～11：30	八木山動物公園 ビジターセンター研修室
第2回研修会－動物の特徴の説明	平成23年1月19日 10：00～（12：00）	八木山動物公園 ビジターセンター研修室
第3回研修会－話し方教室（NHK仙台アナウンサー和田政宗氏）、動物の前で案内の練習	平成23年2月7日 10：00～（12：00）	八木山動物公園 ビジターセンター研修室
第4回研修会（最終回）－来園者への案内の実施，“楽芸員ダッチャ”認定証授与式	平成23年7月3日 9：30～15：00	八木山動物公園 ビジターセンター研修室

## （2）動物学習会

事前のプロジェクト説明も含め、動物公園職員と八木山町内会と本学との3者間で順調にネットワークが育まれた。動物および動物公園についての学習資料は、動物公園のメンバーによって作成された（図1）。また、今後の学習会用及び活動記録、今後の展開として予定しているWebページの充実のために、学習会の様子をビデオで記録した。なお、勉強会の模様はNHKのニュースで2回放送され、河北新報に1度掲載されるなど、各方面から期待が寄せられている（図2、3）。



図1：動物学習会資料



図2：NHK ニュース『てれまさむね』  
（2011年2月1日（火）夕方放送、キャプチャ画像）



楽芸員ダッチャの存在感や親しみやすさを認知してもらうため、楽芸員ダッチャロゴを作成した。デザインは、プロジェクトメンバーの篠原良太によるものである。このロゴを元にして、楽芸員がガイド時に着用するロゴ入りのハットとブルゾンおよび、ガイドの時に使用する案内のぼりを作成した（図4-6）。



図4：楽芸員ダッチャロゴ



図5：楽芸員ダッチャロゴ入りハット



図6：案内のぼり

#### （4）楽芸員ダッチャの誕生（養成試行の成功）と今後の展開

本来のスケジュールでは2011年3月中に実際の動物公園の来園者に対し、楽芸員ダッチャが動物の話を交えながらコースを案内する「ガイド試行」を実施する手筈となっていたが、このたびの震災により動物公園も楽芸員も被災したため、やむなく延期した。しかし、動物公園再開園予定の5月連休明けを目処にプロジェクトを再始動することで関係者は合意し、実際には2011年7月3日（日）に実施の運びとなり、3名の楽芸員ダッチャを認定した。

また、当初の目的である動物公園、八木山連合町内会（会長・副会長、町内会員）と本学とのネットワークは1年間の活動を通してより強固なものとなり、次年度以降の継続についても三者間での合意が得られている。動物公園では5月に人事異動もあり、これまで主に担当をいただいた、大内副園長と三塚飼育係長が異動されるという大きな変化を迎えたが、後任である藤原副園長、小野寺係長の両名に本研究の趣旨にご賛同いただき、

着任早々の大変な時期からご協力を得られたと言うことが今年度の楽芸員ダッチャのガイド試行の成功につながったと言える。また、楽芸員ダッチャ候補者を選定していただいた八木山連合町内会の斎藤会長、玉田副会長は最終試行の日にも顔を出していただき、反省会でも有益なコメントを残していただいた。

5章では、最終ガイド試行や今年度活動の反省から我々が抽出した今後の課題について述べる。

## 5. 今後の課題

### (1) 八木山町内会での楽芸員ダッチャ募集の方法

次期楽芸員ダッチャの研修の案内（公募）は、八木山連合町内会を通して実施する予定である。この中で、八木山動物公園という活動の場と、地域活性化やネットワーク作り・運営体制といったことを結び付けていくことができるかを今後の研究視点としていきたい。まずは楽芸員ダッチャの数が増えなければスケジュールを組む上で支障があり、「（例えば日曜日に行けば）楽芸員ダッチャがいて、ガイドしてくれる動物公園」という社会認知が形成されるに至らない。今回任命された3名の楽芸員ダッチャを中心に、この活動の楽しさや、地域貢献の意義などを上手く伝えてもらいながら、ボランティアに手を挙げていただけるような工夫が必要である。次期の案内については両角が作成し、近日中に配布予定である。

### (2) 楽芸員ダッチャのモチベーション維持とコミュニティの核としてのWebツール展開

楽芸員の方々に主体的に運営してもらうためには、主体的な関与が必要であり、そのためには社会からの認知が必要である。そこでWebサイトを使用し、多くの人に楽芸員ダッチャの活動を知っていただき、本人のやる気（モチベーション）を上げることを試みる。さらに、Webサイトやメールニュースなどの情報発信のツールを準備することで、多くの住民が地域の活動に関与する機会を持つことを支援することができるかどうかを確認する。なお、楽芸員ダッチャ本人より、来園者へのガイド中に質問された内容をその場で答えられない場合には後で飼育員さんに尋ねて来園者にどうにか答えたいという要望もあり、それに応える質問コーナーを作成することも検討している。

### (3) 自立的ボランティアサークルとして地域に根付く活動方法の模索

昨年度の活動により楽芸員ダッチャの育成（主に学習方法）については予定していた回数を行い、来園者相手に動物のエピソードや特徴を話すことが出来るようになったことが確認できた。しかしこれが最終目標ではなく、あくまでも楽芸員ダッチャの育成方法が実現できるかどうかを検証したに過ぎない。本共同プロジェクトの大学側の最終目標として、楽芸員ダッチャが自立し、新たな楽芸員候補者を誘ったり、動物の学習についてアドバイスをしたりする立場となっていただくことを想定している。将来的にその自立を促したいと考えているが、現状では完全なるボランティアとしての志願者（立候補者）を選んだのではなく、動物の学習方法や回数が適当かどうか、またボランティアガイドとして来園者に説明することが可能かどうかを検証するために町内会役員を通して候補者に依頼をしたところからスタートしたという経緯がある。そこで、今年度楽芸員ダッチャに任命された3名の方々が今後もこの活動を継続する意思があることを確認できているものの、自分たちで運営している意識よりは、大学側の依頼による参加者意識が高いのではないかとい



う危惧もある。

今後は楽芸員ダッチャを増やしていきながら、楽芸員が自主的に学習会を開催したり、ガイドボランティアの日程を組んだりすること、つまり動物公園の方々と協力しながら自主的なボランティアサークルとして定着し、地域の活性化につながる方法を協働プロジェクトとして模索していく。そのためには活動が軌道に乗るよう大学がサポートしつつ、いずれかの段階で楽芸員ダッチャの皆さんが主役であることを自覚してもらう必要がある。現段階では3名の（依頼を受けた）楽芸員ダッチャしかおらず、主体的な運営を望むことは酷である。このプロジェクトが抱えている難しさは、ボランティアを育てるために3者が協働していること、すなわち地域住民自らが「ボランティアになる」と言い出していないことである。きっかけは人工的に開始されたボランティア活動であったとしても、メンバーが増え、この取組が地域の方々に認知されればメンバーの中から本来の意味でのボランティアが生まれるのではないかと考えている。そのため、息の長いプロジェクトになると覚悟し、「ボランティア」を地域住民、八木山動物公園、東北工業大学の3者が関与しながら育成する方法論を模索していく。

そのために、いずれ大学の関わりがなくなっても継続できるように、動物公園との信頼関係の構築や地域住民の方々への楽芸員ダッチャの周知や浸透を図ることが我々プロジェクトの活動の柱となっていくだろう。

## 注

- 1) 『八木山動物公園ウェブサポーター』制度（仙台市ホームページより転載）  
ホームページ、ブログ、ツイッターなどで八木山動物公園を応援する情報発信を行っていただける非営利の方等（上限10サイト）  
[http://www.city.sendai.jp/yagiyama/1198438\\_2444.html](http://www.city.sendai.jp/yagiyama/1198438_2444.html)

